

# 冬の蠅

梶井基次郎

青空文庫



冬の蠅とは何か？

よぼよぼと歩いている蠅。指を近づけても逃げない蠅。そして飛べないのかと思つていとやはり飛ぶ蠅。彼らはいったいどこで夏頃の不逞さや憎々しいほどのすばしこさを失つて来るのだろうか。色は不鮮明に黝んで、翅体は萎縮している。汚い臍物で張り切つていた腹は紙撚のように痩せ細つている。そんな彼らがわれわれの気もつかないような夜具の上などを、いじけ衰えた姿で匍つているのである。

冬から早春にかけて、人は一度ならずそんな蠅を見たにちがいない。それが冬の蠅である。私はいま、この冬私の部屋に棲んでいた彼らから一篇の小説を書こうとしている。

## 1

冬が来て私は日光浴をやりはじめた。溪間の温泉宿なので日が翳り易い。溪の風景は朝遅くまでは日影のなかに澄んでいる。やつと十時頃溪向こうの山に堰きとめられていた日光が閃々と私の窓を射はじめる。窓を開けて仰ぐと、溪の空は虻や蜂の光点が忙しく飛

び交っている。白く輝いた蜘蛛の糸が弓形に膨らんで幾条も幾条も流れてゆく。(その糸の上には、なんとという小さな天女！ 蜘蛛が乗っているのである。彼らはそうして自分らの身体を溪のこちら岸からあちら岸へ運ぶものらしい。) 昆虫。昆虫。初冬といっても彼らの活動は空に織るようである。日光が樅かしの梢に染まりはじめ。するとその梢からは白い水蒸気のようなものが立ち騰のぼる。霜が溶けるのだろうか。溶けた霜が蒸発するのだろうか。いや、それも昆虫である。微粒子のような羽虫がそんなふう成群がっている。そこへ日が当たったのである。

私は開け放った窓のなかで半裸体の身体を晒さらしながら、そうした内湾うちうみのように賑やかな溪の空を眺めている。すると彼らがやって来るのである。彼らのやって来るのは私の部屋の天井からである。日蔭ではよぼよぼとしている彼らは日なたのなかへ下りて来るやよみがえったように活気づく。私の脛すねへひやりととまったり、両脚を挙げて腋の下を搔かくような模ねまをしたり手を摩すりあわせたり、かと思うと弱よわしく飛び立っては絡み合ったりするのである。そうした彼らを見ると彼らがどんなに日光を恰たのしんでいるかが憐あわれなほど理解される。とにかく彼らが嬉き戯ぎするような表情をするのは日なたのなかばかりである。それに彼らは窓が明いている間は日なたのなかから一步も出ようとはしない。日が翳かげ

るまで、移つてゆく日なたのなかで遊んでいたのである。虻や蜂があんなにも澁刺はつらつと飛び廻っている外気のなかへも決して飛び立とうとはせず、なぜか病人である私を模ねまている。しかしなんという「生きんとする意志」であろう！ 彼らは日光のなかでは交尾することを忘れない。おそらく枯死からはそう遠くない彼らが！

日光浴をするとき私の傍らに彼らを見るのは私の日課のようになってしまっていた。私は微かな好奇心と一種馴染なじみの気持から彼らを殺したりはしなかった。また夏の頃のように猛たけだけしい蠅捕り蜘蛛がやつて来るのでもなかった。そうした外敵からは彼らは安全であったと言えるのである。しかし毎日たいてい二匹宛ほどの彼らがなくなっていた。それはほかでもない。牛乳の壘びんである。私は自分の飲みつ放しを日なたのなかへ置いておく。すると毎日決まったようにそのなかへはいつて出られないやつができた。壘の内側を身体に付著した牛乳を引き摺ずりながらのぼつて来るのであるが、力のない彼らはどうしても中途で落ちてしまう。私は時どきそれを眺めていたりしたが、こちらが「もう落ちる時分だ」と思う頃、蠅も「ああ、もう落ちそうだ」というふうに動かなくなる。そして案の定落しやうちてしまう。それは見ていて決して残酷でなくはなかった。しかしそれを助けてやるというような気持は私の倦アンニユイ怠イからは起こつて来ない。彼らはそのまま女中が下げてゆく。蓋ふた

をしておいてやるという注意もなおのことできない。翌日になるとまた一匹宛はいつて同じことを繰り返していた。

「蠅と日光浴をしている男」いま諸君の目にはそうした表象が浮かんでいるにちがいない。日光浴を書いたついでに私はもう一つの表象「日光浴をしながら太陽を憎んでいる男」を書いてゆこう。

私の滞在はこの冬で二た冬目であつた。私は好んでこんな山間にやって来ていているわけはなかつた。私は早く都会へ帰りたい。帰りたいと思ひながら二た冬もいてしまつたのである。いつまで経つても私の「疲労」は私を解放しなかつた。私が都会を想ひ浮かべるごとに私の「疲労」は絶望に満ちた街々を描き出す。それはいつになつても変改へんかいされない。そしてはじめ心に決めていた都会へ帰る日取りは夙とうの昔に過ぎ去つたまま、いまその影も形もなくなつていたのである。私は日を浴びていても、否、日を浴びるときはことに、太陽を憎むことばかり考えていた。結局は私を生かさないのであろう太陽。しかもうつとりとした生の幻影で私を瞞だまそうとする太陽。おお、私の太陽。私はだらしのない愛情のように太陽が癩しやくに触つた。裘けごろものようなものは、反対に、緊ストレート・ジャケット迫衣ジャケットのように私を圧迫した。狂人のような悶もだえでそれを引き裂き、私を殺すであらう酷寒のなかの自由をひたすら

に私は欲した。

こうした感情は日光浴の際身体の受ける生理的な変化——さか旺んになって来る血行や、それにしたがって鈍麻してゆく頭脳や——そう言ったもののなかに確かにその原因を持ってゐる。鋭い悲哀をやわ和らげ、ほかほかと心をたの怡します快感は、同時に重つ苦しい不快感である。この不快感は日光浴の済んだあとなんとも言えない虚無的な疲れで病人を打ち敗かしてしまふ。おそらくそれへの嫌悪から私のそうした憎悪もはいた胚胎したのかもしれないのである。

しかし私の憎悪はそればかりではなく、太陽が風景へ与える効果——眼からの効果——の上にも形成されていた。

私が最後に都会にいた頃——それは冬至に間もない頃であつたが——私は毎日自分の窓の風景から消えてゆく日影に限りない愛惜を持つていた。私は墨汁のようにこみあげて来る悔恨といらだたしさの感情で、風景を埋めてゆく影を眺めていた。そして落日を見ようとする切なさにか駆られながら、見透しのつかない街をあわ慌てふためいてうろろしたのである。今の私にはもうそんな愛惜はなかつた。私は日の当つた風景の象徴する幸福な感情を否定するのではない。その幸福は今や私を傷つける。私はそれを憎むのである。

溪たにの向こう側には杉林が山腹を蔽おほっている。私は太陽光線の偽瞞ぎまんをいつもその杉林で感じた。昼間日が当たっているときそれはただ雑然とした杉の秀ほの堆積たいせきとしか見えなかった。それが夕方になり光が空からの反射光線に変わるとはつきりした遠近にわかれて来るのだ。一本一本の木が犯しがたい威厳をあらわして来、しんしんと立ち並び、立ち静まつて来るのである。そして昼間は感じられなかった地域がここにここに杉の秀ほ並みの間へ想像されるようになる。溪側にはまた檜ひや椎しいの常緑樹に交じって一本の落葉樹が裸の枝に朱色の実を垂れて立っていた。その色は昼間は白く粉を吹いたように疲れている。それが夕方になると眼が吸いつくばかりの鮮やかさに冴える。元来一つの物に一つの色彩が固有しているというわけのものではない。だから私はそれをも偽瞞ぎまんと言うのではない。しかし直射光線には偏頗へんぱがあり、一つの物象の色をその周囲の色との正しい階調から破ってしまうのである。そればかりではない。全反射がある。日蔭は日表ひなたとの対照で闇のようになってしまう。なんとという雑多な溷濁こんだくだろう。そしてすべてそうしたことが日の当った風景を作りあげているのである。そこには感情の弛緩があり、神経の鈍麻があり、理性の偽瞞ぎまんがある。これがその象徴する幸福の内容である。おそらく世間における幸福がそれらを条件としているように。



私は以前とは反対に溪間を冷たく沈ませてゆく夕方を——わずかの時間しか地上に駐ま  
らない黄昏たそがれの厳かな掟おきてを——待つようになつた。それは日が地上を去つて行つたあと、  
路の上の潦みずたまりを白く光らせながら空から下りて来る反射光線である。たとえ人はそのなかで  
は幸福ではないにしても、そこには私の眼を澄ませ心を透き徹らせる風景があつた。

「平俗な日なため！ 早く消えろ。いくら貴様が風景に愛情を与え、冬の蠅を活気づけて  
も、俺を愚昧ぐまい化することだけはできぬわい。俺は貴様の弟子の外光派に唾つばをひっかける。  
俺は今度会つたら医者に抗議を申し込んでやる」

日に当りながら私の憎悪はだんだんたかまつてゆく。しかしなんとという「生きんとする  
意志」であろう。日なたのなかの彼らは永久に彼らの怡たのしみを見棄てない。壇のなかのや  
つも永久に登つては落ち、登つては落ちてゐる。

やがて日が翳りはじめぬ。高い椎の樹へ隠れるのである。直射光線が気疎けうとい回折光線に  
うつろいはじめぬ。彼らの影も私の脛の影も不思議な鮮やかさを帯びて来る。そして私は  
襜褕どてらをまとい硝子窓ガラスを閉しかかるのであつた。

午後になると私は読書をすることにしていた。彼らはまたそこへやって来た。彼らは私  
の読んでゐる本へ纏まつわりついて、私のはぐる頁のためにいつも身体を挟み込まれた。それ

ほど彼らは逃げ足が遅い。逃げ足が遅いだけならまだしも、わずかな紙の重みの下で、あたかも梁はりに押えられたように、仰向けあおむになつたりして藻搔もがかなければならぬのだつた。私には彼らを殺す意志がなかつた。それでそんなとき——ことに食事のときなどは、彼らの足弱がかえつて迷惑になつた。食膳のものへとまりに来るときは追う箸をことさら緩ゆるつくり動かさなくてはならない。さもないと箸の先で汚ならしくも潰つぶれてしまわないとも限らないのである。しかしそれでもまだそれに弾ねられて汁のなかへ落ち込んだりするのがいた。

最後に彼らを見るのは夜、私が寢床へはいるときであつた。彼らはみな天井に貼りついていた。凝じつと、死んだように貼りついていた。——いったい脾弱ひよわな彼らは日光のなかで戯れているときでさえ、死んだ蠅が生き返つて来て遊んでいるような感じがあつた。死んでから幾日も経ち、内臓なども乾きついでしまつた蠅がよく埃ほこりにまみれて転がっていることがあるが、そんなやつがまたのこのこと生き返つて来て遊んでいる。いや、事実そんなことがあるのではなからうか、と言つた想像も彼らのみてくれからは充分に許すことができるほどであつた。そんな彼らが今や凝じつと天井にとまっている。それはほんとうに死んだようである。

そうした、錯覚に似た彼らを眠るまえ枕の上から眺めていると、私の胸へはいつも廓かくり寥ようとした深夜の気配が沁しみて来た。冬ざれた溪間の旅館は私のほかに宿泊人のない夜がある。そんな部屋はみな電燈が消されている。そして夜が更けるにしたがってなんとなく廃墟に宿っているような心持を誘うのである。私の眼はその荒れ寂びた空想のなかに、恐ろしいまでに鮮やかな一つの場面を思い浮かべる。それは夜深く海の香をたてながら、澄み透つた湯を溢れさせている溪傍の浴槽である。そしてその情景はますます私に廃墟の気持を募らせてゆく。——天井の彼らを眺めていると私の心はそうした深夜を感じる。深夜のなかへ心が拡がってゆく。そしてそのなかのただ一つの起きている部屋である私の部屋。——天井に彼らのとまっている、死んだように凝じつととまっている私の部屋が、孤独な感情とともに私に帰って来る。

火鉢の火は衰えはじめて、硝子窓ガラスを潤うるおしていた湯気はだんだん上から消えて来る。私はそのなかから魚のはららごに似た憂鬱な紋々があらわれて来るのを見る。それは最初の冬、やはりこうして消えていった水蒸気がいつの間にかそんな紋々を作ってしまったのである。床の間の隅すみには薄すうく埃をかむつた葉壇かが何本も空からになつてゐる。なんとという倦怠、なんとという因循だろう。私の病鬱は、おそらく他所の部屋には棲すんでいない冬の蠅をさえ

棲<sup>す</sup>ませているではないか。いつになったらいたいこうしたことに覺<sup>けり</sup>がつくのか。

心がそんなことにひっかかると私はいつも不眠を殃<sup>わざわ</sup>いされた。眠れなくなると私は軍艦の進水式を想い浮かべる。その次には小倉百人一首を一首宛思い出してはその意味を考える。そして最後には考え得られる限りの残酷な自殺の方法を空想し、その積み重ねによって眠りを誘おうとする。がらんとした溪間の旅館の一室で。天井に彼らの貼りついている、死んだように凝<sup>じ</sup>つと貼りついている一室で。――

## 2

その日はよく晴れた温かい日であった。午後私は村の郵便局へ手紙を出しに行った。私は疲れていた。それから溪<sup>たに</sup>へ下りてまだ三四丁も歩かなければならない私の宿へ帰るのがいかにも億<sup>おっくう</sup>劫<sup>くわう</sup>であった。そこへ一台の乗合自動車を通りかかった。それを見ると私は不意に手を挙げた。そしてそれに乗り込んでしまったのである。

その自動車は村の街道を通る同族のなかでも一種目だった特徴で自分を語っていた。暗い幌<sup>ほろ</sup>のなかの乗客の眼がみな一様に前方を見詰めている事や、泥除け、それからステップ

の上へまで溢れた荷物を麻繩が車体へ縛りつけている恰好や——そんな一種の物ものしい特徴で、彼らが今から上り三里下り三里の峠を躓こえて半島の南端の港へ十一里の道をゆく自動車であることが一目で知れるのであった。私はそれへ乗ってしまつたのである。それにしてはなんとという不似合いな客であつたらう。私はただ村の郵便局まで来て疲れたというばかりの人間に過ぎないのだつた。

日はもう傾いていた。私には何の感想もなかつた。ただ私の疲労をまぎらしてゆく快い自動車の動揺ばかりがあつた。村の人が背負い綱を負つて山から歸つて来る頃で、見知つた顔が何度も自動車を除よけた。そのたび私はだんだん「意志の中ぶらり」に興味を覚えて来た。そして、それはまたそれで、私の疲労をなにか變わつた他のものに変えてゆくのだつた。やがてその村人にも会わなくなつた。自然林が廻つた。落日があらわれた。溪たにの音が遠くなつた。年古としふりた杉の柱廊が続いた。冷たい山気が沁しみて来た。魔女の跨またつた筈ほうぎのように、自動車は私を高い空へ運んだ。いったいどこまでゆこうとするのだろう。峠の隧すい道いしどうを出るともう半島の南である。私の村へ歸るにも次の温泉へゆくにも三里の下り道である。そこへ来たとき、私はやつと自動車を止めた。そして薄暮の山の中へ下りてしまつたのである。何のために？ それは私の疲労が知つている。私は腑甲斐ぶがいない一人の私を、

人里離れた山中へ遺棄してしまつたことに、気味のいい嘲笑を感じていた。

檜鳥かけすが何度も身近から飛び出して私を愕おどろかした。道は小暗い谿たにひだ 澗を廻つて、どこまで行つても展望がひらけなかつた。このままで日が暮れてしまつてはと、私の心は心細さでいっぱいであつた。幾たびも飛び出す檜鳥は、そんな私を、近くで見ると大きな姿で脅かしながら、葉の落ちた櫟けやきや榎ならの枝を匍はうように渡つて行つた。

最後にとうとう谿が姿をあらわした。杉ほの秀が細胞のように密生している遙かな谿！

なんとというそれは巨大な谿だつたらう。遠と靄おものなかには音もきこえない水も動かない滝が小さく小さく懸めつていた。眩暈めまいを感じさせるような谿底には丸太を組んだ櫛そり道みちが寒ざむと白く匍はつていた。日は谿向こうの尾根へ沈んだところであつた。水を打つたような静けさがいまこの谿を領していた。何も動かず何も聴こえないのである。その静けさはひよつと夢かと思うような谿の眺めになおさら夢のような感じを与えていた。

「ここでこのまま日の暮れるまで坐つていられるということ、なんとという豪華な心細さだろ」と私は思った。「宿では夕飯の用意が何も知らずに待っている。そして俺は今夜はどうなるかわからない」

私は私の置き去りにして来た憂鬱な部屋を思い浮かべた。そこでは私は夕餉ゆうげの時分きま

つて発熱に苦しむのである。私は着物ぐるみ寢床へ這入<sup>はい</sup>っている。それでもまだ寒い。悪寒に慄<sup>ふる</sup>えながら秋の頭は何度も浴槽を想像する。「あすこへ漬<sup>ひ</sup>つたらどんなに気持ちいいことだろう」そして私は階段を下り浴槽の方へ歩いてゆく私自身になる。しかしその想像のなかでは私は決して自分の衣服を脱がない。衣服ぐるみそのなかへはいつてしまっているのである。私の身体には、そして、支えがない。私はぶくぶくと沈んでしまい、浴槽の底へ溺死体のように横たわつてしまう。いつもきまつてその想像である。そして私は寢床のなかで満潮のように悪寒が退いてゆくのを待っている。――

あたりはだんだん暗くなつて来た。日の落ちたあとの水のような光を残して、冴<sup>さ</sup>えざえとした星が澄んだ空にあらわれて来た。凍えた指の間の煙草の火が夕闇のなかで色づいて来た。その火の色は曠<sup>こう</sup>漠<sup>ぼく</sup>とした周囲のなかでいかにも孤独であった。その火を措<sup>お</sup>いて一点の燈火も見えずにこの谿<sup>たに</sup>は暮れてしまおうとしているのである。寒さはだんだん私の身体へ匍<sup>は</sup>い込んで来た。平常外気の冒さない奥の方まで冷え入つて、懐ろ手をしてもなんの役にも立たないくらいになつて来た。しかし私は暗<sup>やみ</sup>と寒気がようやく私を勇氣づけて来たのを感じた。私はいつの間にか、これから三里の道を歩いて次の温泉までゆくことに自分を予定していた。犇<sup>ひし</sup>ひしと迫つて来る絶望に似たものはだんだん私の心に残酷な欲望を募

らせていった。疲労または倦アンニユイ怠イがたんそうしたものに変わったが最後、いつも私は終わりまでその犠牲になり通さなければならぬのだった。あたりがとっぷり暮れ、私をやつとそこを立ち上がったとき、私はあたりにまだ光があったときとはまったく異つた感情で私自身を艤装ギソウしていた。

私は山の凍てついた空気の中を暗やみをわけて歩き出した。身体はすこしも温かくもならなかつた。ときどきそれでも私の頬を軽くなでてゆく空気が感じられた。はじめ私はそれを発熱のためか、それとも極端な寒さのなかで起る身体の変調かと思つていた。しかし歩いてゆくうちに、それは昼間の日のほとぼりがまだ斑まだらに道に残つてゐるためであるらしいことがわかつて来た。すると私には凍つた闇やみのなかに昼の日射しがありありと見えるように思ははじめた。一つの燈火も見えないものも私には変な気を起こさせた。それは灯がついたということで、もしくは灯の光の下で、文明的な私達ははじめて夜を理解するものであるということに信ぜしめるに充分であつた。真暗な闇にもかかわらず私はそれが昼間と同じであるような感じを抱いた。星の光つてゐる空は真青であつた。道を見分けてゆく方法は昼間の方法と何の変わったこともなかつた。道を染めてゐる昼間のほとぼりはなおさらその感じを強くした。



突然私の後ろから風のような音が起こった。さつと流れて来る光のなかへ道の上の小石が歯のような影を立てた。一台の自動車は、それを避けている私には一顧の注意も払わずに走り過ぎて行つた。しばらく私はぼんやりしていた。自動車はやがて谿<sup>たにひだ</sup>を廻つた向こうの道へ姿をあらわした。しかしそれは自動車が走っているというより、ヘッドライトをつけた大きな闇が前へ前へ押し寄せてゆくかのように見えるのであった。それが夢のようになくなってしまふとまたあたりは寒い闇に包まれ、空腹した私が暗い情熱に溢れて道を踏んでいた。

「なんという苦い絶望した風景であろう。私は私の運命そのままの四圍のなかに歩いている。これは私の心そのままの姿であり、ここにいて私は日なたのなかで感じるようななんらの偽瞞をも感じない。私の神経は暗い行手に向かつて張り切り、今や決然とした意志を感じる。なんというそれは気持のいいことだろう。定罰のような闇、膚を劈<sup>さ</sup>く酷寒。そのなかでこそ私の疲労は快く緊張し新しい戦慄を感じる事ができる。歩け。歩け。へたばるまで歩け」

私は残酷な調子で自分を鞭打<sup>むち</sup>つた。歩け。歩け。歩け。歩き殺してしまえ。

その夜晩おそく私は半島の南端、港の船着場を前にして疲れ切った私の身体を立たせていた。私は酒を飲んでいた。しかし心は沈んだまますこしも酔っていなかった。

強い潮の香に混つて、瀝青チヤンや油の匂いが濃くそのあたりを立て罩こめていた。もやい綱が船の寢息のようにきしり、それを眠りつかせるように、静かな波のぼちやぼちやと舷側たたを叩く音が、暗い水面にきこえていた。

「××さんはいないかよう！」

静かな空気を破つて媚なまめいた女の声が先ほどから岸で呼んでいた。ぼんやりした燈あかりを睡ねむそうに提ひげている百噸トシあまりの汽船のともの方から、見えない声が不明瞭になにか答えている。それは重々しいバスである。

「いないのかよう。××さんは」

それはこの港に船の男を相手に媚こびを売っている女らしく思える。私はその返事のバスに人ごとながら聴耳あいかわらずをたてたが、相不あいま変あいま曖あいま昧あいまな言葉が同じように鈍い調子で響くばかりで、やがて女はあきらめたようすでいなくなってしまった。

私は静かな眠った港を前にしながら転変に富んだその夜を回想していた。三里はとつくに歩いたと思つているのにいくらしてもおしまいにならなかつた山道や、谿たにのなかに発電

所が見えはじめ、しばらくすると谿の底を提<sup>ちようちん</sup>灯<sup>あん</sup>が二つ三つ閑かな夜の挨拶を交しながらもつれて行くのが見え、私はそれがおおかた村の人が温泉へはいりにゆく灯で、温泉はもう真近にちがいないと思ひ込み、元氣を出したのにみごと当てがはずれたことや、やつと温泉に着いて凍え疲れた四肢を村人の混み合っている共同湯で温めたときの異様な安堵<sup>あんど</sup>の感情や、——ほんとうにそれらは回想という言葉にふさわしいくらい一晚の経験としては豊富すぎる内容であつた。しかもそれでおしまいというのではなかつた。私がやつと腹<sup>ふく</sup>を膨らして人心つくかつかぬに、私の充たされない残酷な欲望はもう一度私に夜の道へ出ることを命令したのであつた。私は不安な当てで名前も初耳な次の二里ばかりも離れた温泉へ歩かなければならなかつた。その道でとうとう私は迷つてしまい、途方に暮れて暗<sup>やみ</sup>のなかへ蹲<sup>うずく</sup>まっていたとき、晚<sup>おそ</sup>い自動車が通りかかり、やつとのことでそれを呼びとめて、予定を変えてこの港の町へ来てしまったのであつた。それから私はどこへ行つたか。私はそんなところには一種の嗅覚でも持つているかのように、堀割に沿つた娼家の家並みのなかへ出てしまつた。藻草を纏つたような船夫達が何人も群れて、白く化粧した女を調戲<sup>からつか</sup>しながら、よろよろと歩いてゐた。私は二度ほど同じ道を廻り、そして最後に一軒の家へ這<sup>は</sup>入<sup>い</sup>つた。私は疲れた身体に熱い酒をそそぎ入れた。しかし私は酔わなかつた。酌に來た女

は秋刀魚船の話をした。船員の腕にふさわしい逞しい健康そうな女だった。その一人は私に姪をすすめた。私はその金を払ったまま、港のありかをきいて外へ出てしまったのである。

私は近くの沖にゆつくり明滅している廻転燈台の火を眺めながら、永い絵巻のような夜の終わりを感じていた。舷の触れ合う音、とも綱の張る音、睡たげな船の灯、すべてが暗く静かにそして内輪で、柔やかな感傷を誘った。どこかに捜して宿をとろうか、それとも今の女のところへ帰ってゆこうか、それはいずれにしても私の憎悪に充ちた荒々しい心はこの港の埠頭で尽きていた。ながい間私はそこに立っていた。気疎い睡気のようなものが私の頭を誘うまで静かな海の暗を見入っていた。――

私はその港を中心にして三日ほどもその付近の温泉で帰る日を延ばした。明るい南の海の色や匂いはなにか私には荒々しく粗雑であった。その上卑俗で薄汚い平野の眺めはすぐに私を倦かせてしまった。山や溪が※ぎ合い心を休める余裕や安らかな望みのない私の村の風景がいつか私の身についてしまったことを私は知った。そして三日の後私はまた私の心を封じるために私の村へ帰って来たのである。

私は何日も悪くなつた身体を寢床につけていなければならなかつた。私には別にさした後悔もなかつたが、知つた人びとの誰彼がそうしたことを聞けばさぞ陰気になり気を悪くするだろうとそのことばかり思つていた。

そんなある日のこと私はふと自分の部屋に一匹も蠅がいなくなつてゐることに気がついた。そのことは私を充分驚かした。私は考えた。おそらく私の留守中誰も窓を明けて日を入れず火をたいて部屋を温めなかつた間に、彼らは寒気のために死んでしまつたのではなからうか。それはありそうなことに思えた。彼らは私の静かな生活の余徳を自分らの生存の条件として生きていたのである。そして私が自分の鬱屈した部屋から逃げ出してわれとわが身を責め<sup>さいな</sup>虐んでいた間に、彼らはほんとうに寒気と飢えで死んでしまつたのである。私はそのことにしばらく憂鬱を感じた。それは私が彼らの死を<sup>いた</sup>傷んだためではなく、私にもなにか私を生かしそしていつか私を殺してしまうきまぐれな条件があるような気がしたからであつた。私はそいつの幅広い背を見たように思った。それは新しいそして私の自尊

心を傷つける空想だった。そして私はその空想からますます陰鬱を加えてゆく私の生活を感じたのである。

# 青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「創作月刊」

1928（昭和3）年5月号

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.utiyaana

校正：横木雅子

1999年1月14日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 冬の蠅

梶井基次郎

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>